

平成 31 年度 東京学芸大学附属高等学校 学校経営計画

1 附属学校の役割

- 学部・大学院における研究を附属学校で実際の指導に取り入れ、その結果を学部・大学院の教育研究に反映していく実験・実証校としての役割
- 学部・大学院の教育研究に基づいて、教育実習生を指導する教育実習校としての役割
- 一般公立学校と同様に普通教育を行う公教育の役割
- 地域の学校と連携して教育・研究を推し進める役割

2 東京学芸大学附属学校教育目標

東京学芸大学附属学校は、在学する幼児・児童・生徒に普通教育を施すとともに、大学と連携して実証的研究や実践的研究に取り組むことにより、

- 協働して課題を解決する力
- 多様性を尊重する力
- 自己を振り返り、自己を表現する力
- 新しい社会を創造する力

の四つの力を持った次世代の子どもを育成する教育を推進する。

3 東京学芸大学附属高等学校教育目標

- 清純な気品の高い人間を育てる
- 大樹のように大きく伸びる自主的な人間を育てる
- 世界性の豊かな人間を育てる

4 育てたい生徒像

多様な分野でイノベーションを引き起こし、国際社会に貢献する人間

① 生涯学習者としての学習に向かう姿勢

生涯にわたり、知的好奇心と学習していく意欲を持ち、自ら学習する「方法」を身につけるとともに、学習によって獲得した力を他者のために活用する意欲に溢れ、挫折をも糧として成長していくタフな人間を育成する。

② 適切な情報収集・分析能力と課題発見能力

情報処理に関する基礎的・基本的な知識技能を持つとともに、情報を扱うことに対する適切な倫理観を育成する。さらに、錯綜した複雑な情報の中から重要なものを選び出し自らの目的に沿った課題を発見する力を育成する。

③ 柔軟にダイバーシティを受け入れ活用する力

アジアをはじめとした海外の研究機関・大学・高校と連携して、共同研究及び交流を行うことで、グローバル化に対応した、異なった文化・価値観を持つ人々と協働しその多様性を生かしていく柔軟な知性を育成する。そのための英語力をはじめとした豊かなコミュニケーション能力を育てる。

5 中期経営目標（以下、平成 32 年度を達成年度とする）

- 校長のガバナンスを強化し、迅速かつ適切な判断と実行を可能とする学校組織を構築する。
- 新学習指導要領と高大接続改革の目指す方向に沿った、現代的で充実した教科指導を実現する。
- 塾等に頼らず、現役で生徒の志望校合格を実現する進路体制を構築する。
- いじめを根絶する。
- イノベーターとなる人材を育成する教育について全国の高校等に発信する。

6 年度経営目標

生徒・保護者による学校評価では、「教員の専門知識と授業内容」「行事や部活動」「キャリアガイダンス」はよいとされ、「本校に入学して・入学させて良かったと思う」がおよそ 90%以上であった。一方、「進路指導や進学情報の提供」、「ホームページ等での学校の広報活動」、「環境整備や安全対策」では評価が低かった。現下の社会状況と学校評価の結果とを踏まえて、「大学、附属中学校との連携」、「本物教育の推進と進路支援」、「積極的な情報発信」、「働き方改革の視点での業務改善」、「災害及び不審者からの安全」とを今年度の重点目標とする。下の記述で◎は特に重点的に取り組む内容である。

(1) 学校運営の目標

「積極的な情報発信」と「働き方改革の視点での業務改善」のために以下の取り組みを行う。

- ◎ ホームページを改善し、各種情報を迅速かつ簡便に伝える。特に校長通信、各種行事や部活の状況、進学状況等はできるだけ早く掲載する。月に2回程度はホームページが更新されるようにする。
- ◎ 授業公開、本校での学校説明会、塾等に赴いての学校説明会など年に20回以上行う。
- 行事や部活動における生徒の主体的な行動を保障する中で、教員の負担軽減を図る。
- ペーパーレス化等により、会議を効率的に行い、時間短縮をするとともに勤務時間外での開催をなくす。

(2) 教育活動の目標

「本物教育の推進と進路支援」と「災害及び不審者からの安全」のために以下の取り組みを行う。

- ◎ 従来の本物教育を強化し探究活動等により「課題発見能力」「思考力」「判断力」「表現力」を育成する。
- 新学習指導要領と高大接続改革に沿ったカリキュラムを開発する。
- ◎ 各学年で外部模試を導入することにより、他校との比較、他学年との比較、同一学年の継時変化等を分析し、教科指導と進路指導に有効に活用する。特に1学年では入学時の学力を客観的に把握する。英語については、民間の英語4技能試験を年2回実施し、現代的な英語教育を行う。
- ◎ 外部模試の返却時の生徒への指導を充実させるとともに、教員の進路指導研修を年2回行う。
- ◎ 年2回の医学部ガイダンスに続き、他の職業に関するキャリア教育を同窓会等との連携で行う。
- ◎ 大学入試の過去問題の添削指導や、昨年度より始めた大学個別試験対応の講習をより充実させる。
- ◎ 匿名でのいじめ通報システム、年2回の記名でのアンケート、スクールカウンセラーによる自尊感情を調べるアンケートと事後のカウンセリング、毎週行ういじめ防止対策委員会と生徒支援委員会、管理職とスクールカウンセラー、養護教員とのミーティング等により、いじめを未然に防ぎ、重大化を阻止する。
- 情報産業関係者による講演と教科情報の授業を通じて、生徒の情報対応力を強化する。
- ◎ 災害等を想定した避難訓練を年3回以上行う。
- ◎ 不審者対応を想定した教員対象の実地訓練を地域の警察の協力で行う。
- 図書館においては、生徒の意見聴取と広報活動の強化で貸し出し数を1.2倍に増加させる。

(3) 研究活動の目標

- ◎ SSHの中間報告を整理するとともに、理数融合の授業と工学的発想での理科授業を研究する。
- 海外の学校等との交流により、生徒に研究の方法を学ばせるとともに、コミュニケーション能力とダイバーシティを活用する能力とを育てる。
- ◎ 本校での公開教育研究大会、授業実践研究会、現職教員研修講座等の参加者、他校からの訪問者に事後調査をして、本校の研究成果の活用状況を分析する。
- ◎ コーディネーターを活用しての東京学芸大学との共同研究を行う。

(4) 学生の教育・支援活動の目標

「大学、附属中学との連携」のために、以下の取り組みを行う。

- ◎ 東京学芸大学および他大学の教育実習生約200名に充実した教育実習を施す。
- コーディネーターを設置し、大学教員および学生と共同研究を推進する。
- 校長をはじめ本校教員が東京学芸大学に赴き講義を行う。
- 本校の教育実践を、東京学芸大学学生に積極的に公開する。
- ◎ 「中学生の日（仮称）」での中学生の本校での体験授業などにより、中学校との連携を強化する。
- ◎ 教育インキュベーションセンター設置等に伴う、新たな特色化の推進の方策を大学と連携して検討する。

(5) 社会貢献活動の目標

- 地域の防災活動に生徒の代表等が参加して、交流するとともに地域を愛する心を育てる。
- ◎ 特別支援学校等との交流によりインクルーシブ教育を実践する。
- ◎ 生徒有志が東日本大震災の被害地域を訪ね、自分たちでできるボランティア活動について考える。